

漁師の経験を魚の木彫りに生かす 深渡栄一さん（野田村）64歳

輝く シニア

約30年前から趣味で魚などの海洋生物の木彫りを続けている漁師の深渡栄一さん。自宅には600点以上の作品が所狭しと並べられています。精巧に掘られた大小さまざまな種類の作品は、どれも木目がうまく生かされ、生命が宿ったかのような仕上がりです。作品を一目見ようと国内のみならず、海外からも人が訪れています。



600点超の作品は自宅の部屋だけでは収まりきらず、小屋と漁具用の倉庫にも保管

木彫りの創作を始めたきっかけは、海が荒れて漁に出られない日に、元々好きだった彫刻を始めたことでした。木彫りの漁船のミニチュア模型が仕事仲間の目に留まり、村の文化祭への出展を勧められました。文化祭で高い評価を得て、本格的に木彫りの創作を始めました。

深渡さんは、15歳から遠洋漁業に携わり、北洋・アラスカなどで20年以上海上生活を送ってきました。仕事で目にした魚などの姿が鮮明に記憶に残り、それを表現したいという思いが創作活動につな

がっています。木に魚を掘る理由については、「木目の美しさを利用すれば、魚の生気を生き生きと表現できるといった」と話します。

東日本大震災津波では、地震があった時間は漁場で作業中でしたが、すんでのところでした。しかし、船や漁具、倉庫のほか、彫刻の道具、作品の一部までもが流されたうえに、同年、追い打ちをかけるようにリウマチが発症。一時、仕事と彫刻を続けることを

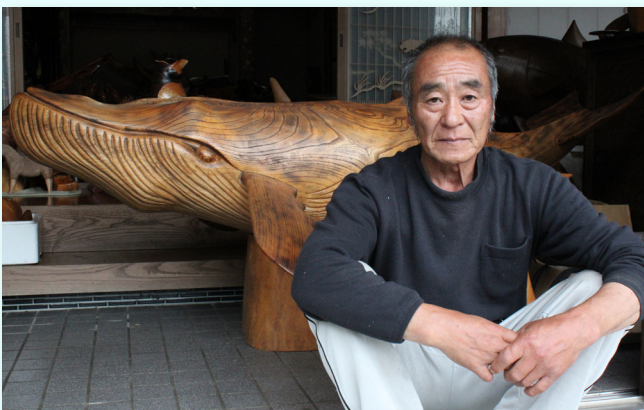
断念しましたが、国内外からの多くの応援で再開できました。

来訪者は遠くは海外から来ることもあります。「作品を見に来る人は、ついでに周辺の観光名所にも立ち寄る。

魚の彫刻は岩手の良さを知ってもらうことにも役立っているのではないかと、創作活動が思わぬ効果をもたらしていることに笑みをこぼします。

夢は、「木の魚の水族館」の建設。現在は、早朝、定置網の漁に出かけ、仕事が落ち着く屋前には彫刻に取り掛かっています。今年1月、「水族館」建設に向けて賛同者らと一般社団法人を設立し、現在も支援金を募っています。リウマチの症状を抑える薬の投与を続け、ときおり痛みを伴いながらの創作にも、『水族館』の建設という夢が、日々の生きがいを支えている」と語っています。

深渡さんへの問い合わせは、080-8211-7504まで。



「おおがかりな作品になると、制作期間は1つの作品で2、3か月に及ぶこともある」と語る深渡さん

政府は 6 月に、平成 29 年版の高齢社会白書を公表しました。平成 28（2016）年 10 月 1 日現在、わが国の 65 歳以上の高齢者人口は、3,459 万人で総人口に占める高齢化率は 27.3%（前年 26.7%）です。また、本県の高齢者人口は、39 万 3 千人で、高齢化率は 31.1%（前年 30.5%）となっています。

今年の白書では、高齢者の経済生活や生活環境、社会的な貢献活動に関する実態と意識を把握するため、全国の 60 歳以上の男女を対象に、内閣府が実施した「高齢者の経済・生活環境に関する調査」（平成 28 年）の結果が掲載されていますので紹介します。

（経済生活）

- ・経済的な暮らし向きについて、「心配ない」と回答する人は 64.6% で、「心配である」は 34.8%。「心配である」の割合が特に高いグループは、男性単身世帯の 48.4%、女性の二世帯世帯（親と同居）の 48.1%である。
- ・1 か月あたりの平均収入額（年金を含む）は、「10 万円～20 万円未満」の世帯が全体の 32.9% と最も高く、単身世帯では「月収 10 万円未満」が男女とも 4 割弱と高い。
- ・生活の維持のためなど、何らかの理由で貯金をしている人が全体の 7 割以上ある一方、「貯蓄はない」も 22.7% 見られる。
- ・貯蓄の目的については、「万一の備えのため」と「子供や家族に残すため」の計、すなわちすぐに使わな

い目的が約 5 割となっている。

- ・学生を除く 18 歳以上の子や孫がいる人は全体の 83.4%。そのうち、子や孫の生活費をまかなっているのは 20.8%。特に男性では 60～64 歳の層で 34.6%と、他の年齢層に比べて高い。

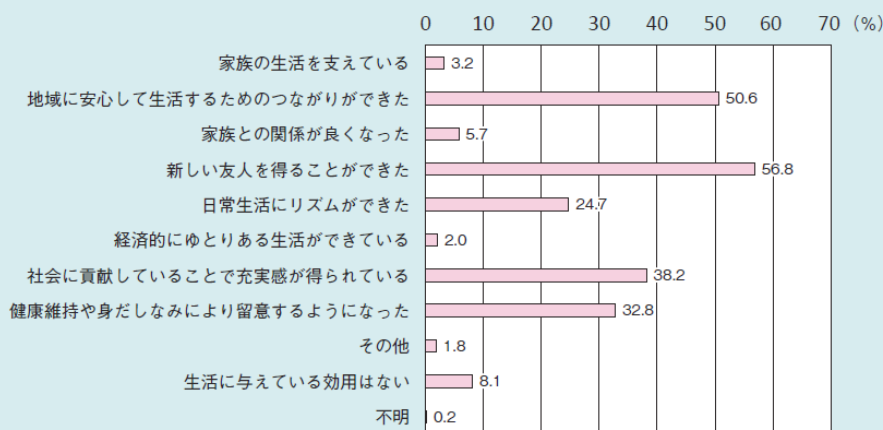
（生活環境）

- ・徒歩圏内（自宅から 500 メートル圏内）で利用可能な施設は、都市規模が小さいほど、「コンビニエンスストア」や「スーパーや商店など商業施設」があるとの回答割合が低い。大都市では 8 割以上、町村部では 5 割程度である。
- ・日常の買い物の仕方については、全体では、「自分でお店に買いに行く」が 75.9% と最も高い。大都市で 78.0%、町村でも 71.1% と高い比率を示している。
- ・買い物に行くときの交通手段は、全体では「自分で自動車等を運転」が 55.6% と高く、「徒歩」が 28.4% となっている。大都市では約半数が徒歩、町村では 7 割近くが「自分で自動車等を運転」と回答している。

（社会的な貢献活動）

- ・何らかの社会的な貢献活動に参加していると回答した人は約 3 割で、残りの 7 割は「特に活動をしていない」と回答しているが、活動をしていない人でも「活動する意思がある」と回答した人は、男女とも 7 割を超えている。
- ・参加している活動では、「自治会、町内会などの自治組織の活動」「趣味やスポーツを通じたボランティア・社会奉仕などの活動」が多い。

図 1-3-18 社会的な活動をしてよかったこと（複数回答）



（注1）回答条件は社会的な活動をしている者

（注2）複数の活動をしている場合は、最も力を入れている活動について回答している。

- ・活動を始めたきっかけは、「自治会、町内会などの誘い」「友人、仲間のすすめ」「個人の意思」の順となっている。
- ・社会的な貢献活動をしていてよかったと思うことについては、「新しい友人を得ることができた」「地域に安心して生活するためのつながりができた」が 5 割台と高い。

資料：内閣府「高齢者の経済・生活環境に関する調査」（平成 28 年）※調査対象は、全国の 60 歳以上の男女（施設入所者は除く）

久慈かたくりの会（久慈市） 大橋 泰子 会長 会員 13 名

がん、心臓病、糖尿病などに代表される生活習慣病の患者とその家族などへの支援を行うために平成 13 年に設立。地元の病院を会場に、定期的ながんサロン開催による支援を行っています。がんサロンは、がん患者やその家族が抱える不安や孤独感を軽減しようと、療養上の悩みなどを語り合う場としています。また、地元の病院などと連携して講演会などを開催し、医療の最新情報や福祉情報などの提供・交換も行っています。



高齢者の明るいまちづくりの会（盛岡市） 吉田 明美 会長 会員 3 名

地域の高齢者の交流の機会を増やし、高齢期の生きがいづくりや安心して暮らせる地域づくりを目指そうと平成 21 年に設立。毎月第 2、第 3 金曜日にサロンを開催し、健康講座や軽体操、レクリエーション、手芸や編み物などの創作活動を行っています。会場は空き家となった民家を借り、「高齢者のたまり場 みんなの家」と看板を掲げ、高齢者が気軽に立ち寄れる場としています。



陽花会（遠野市） 山尾 陽子 代表 会員 17 名

地域の高齢者の生きがいづくり、孤立防止を目的として、遠野市内の市民交流サロンなどを会場に「パンの花教室」を開催しています。「パンの花」とは、粘土を材料として作成した花等の創作物に油絵具などで彩色を施したものです。平成 10 年に設立し、当初、参加者の大半は高齢者でしたが、現在は視聴覚障がい者なども参加。活動の幅が徐々に地域に広がり、仲間づくり、生きがいづくりにつながっています。



ほのぼのネット宮園（宮古市） 山崎 茂夫 代表 会員 6 名

宮古市宮園地区の高齢者が平成 28 年に設立。地域の高齢者の健康づくりと交流などによる支え合い意識の醸成を目指し、毎月、「ほのぼのカフェ」を開催。カフェでは、健康教室や音楽療法教室などを開催するほか、地域の福祉施設や子どもたちとの交流の場もつくっています。各世代の交流の機会を増やすことで、住民同士の声掛けや高齢者の見守りにつながっていきたいと考えています。



長命会（一関市） 阿部 堅治 会長 会員 38 名

一関市巖美町の高齢者が昭和 39 年に設立。地域の環境美化を推進しようと、巖美溪畔や巖美公園の清掃のほか、市立博物館前の花壇づくり、環境に係る学習会などを行っています。また、高齢者と若者との交流が希薄になりがちであったことから、今年度からは、世代間交流事業などの取組も開始。地域に伝わる伝統行事や民謡・舞踊を若い世代に伝承することを通じて地域の活性化を目指しています。



（ここで紹介したすべての団体では、活動の一部に、公益財団法人いきいき岩手支援財団の「ご近所支え合い活動助成金」が活用されています。）

すいかっこクラブ滝沢（藤沢昭子代表、会員 10 名）は、「高齢者が主体的に団体を構成し、地域の歴史、民俗、文化等を記録し後世に残すための調査を行うとともに、地域交流活動や被災地支援活動を通じて、社会貢献すること」を目的に、平成 27 年 1 月に結成されました。会員の多くは、滝沢市が開催する 60 歳以上の市民を対象とした大学（睦大学）の趣味講座の受講生で、会の趣旨に賛同した高齢者によって構成されており、県外にも多くの賛助会員がいます。

主な活動内容は、歴史・民俗・文化等の聴き取り調査、地域交流活動、被災地支援活動などです。

聴き取り調査では、市内の 80 代～90 代の高齢者宅を訪問し、歴史・民俗・文化等について取材を行います。訪問する地区は、市内・旧村の 6 地区。大正から昭和にかけての生活の様子や、各個人の生い立ち、地元の史跡、昔話など、聴き取りは幅広い分野に及びます。聴き取りの様子は録画し、DVD に収録。今後、広く市民に伝えていく予定です。

地域交流活動としては、市内の高齢者や他団体との交流会を開催しています。交流会では、参加者が歌や芸などの特技を披露するほか、昔遊びなどのゲーム、演劇、くすみ割り大会などを行います。また、市内で減塩の普及啓発活動に取り組んでいる団体とも交流を行い、減塩料理を調理しながら学ぶなど、健康への自覚を高める機会にもなっています。

被災地支援活動は、会員が個別に行っていた支援活動を、会が引き継いで行っているものです。当初の支援は、主に支援物資の提供や、手品や紙芝居などの慰問活動を行っていましたが、現在は、朝市の中



すいかっこクラブ滝沢の会員の皆さん

で「被災地支援バザー」を年 2 回開き、その売り上げを義援金として提供しています。バザーの物品は、全国の賛助会員から送られてきた衣類など。また、このバザーの売り上げは、県内の被災地のほかに、熊本など他県の被災地にも贈っています。

このような被災地支援がきっかけとなり、田野畑村の地域活動団体とは「三閉伊一揆」の歴史研究で交流を深めています。また、昨年は「第 1 回いわての民話まつり」に参加し、県内で活動する語り部などと交流を図るなど、年々、活動の幅を広げています。

藤沢代表は、「会員はすべて高齢者だが、気持ちは若く、学習意欲もボランティア意識も高い。若い世代や高齢者施設などとも交流していきたいという会員の声もあり、活動に意欲的である。今後も、小規模ながら社会貢献活動に楽しんで取り組みたい。そして、地域の魅力を多くの人に知ってもらえるよう、発信力を高めたい」と話しています。

（この活動の一部に、公益財団法人いきいき岩手支援財団の「ご近所支え合い活動助成金」が活用されています。）



昔の生活や文化などについて聴き取り調査を行っている様子



他団体との交流会で行った、縄綯大会の様子

岩手県高齢者社会貢献活動サポートセンターは、特定非営利活動法人いわての保健福祉支援研究会が岩手県から委託を受けて運営しています。

〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通 2-4-16 やまのえんビル 1 階 tel 019-604-8862 URL <http://www.hfk.or.jp/>